

牧口常三郎の川越中学校に於ける明治40年10月の演説

—『大家族』第3巻第1号（明治40年12月）—

塩原将行・北川洋子

今回紹介する「本會並に附屬女藝教習所の趣旨」は、牧口が発行兼編輯人をしていた『大家族』第3巻第1号（明治40年12月発行）に掲載されているものである。『大家族』は、牧口が主幹を務める女性のための通信教育の団体、大日本高等女学会が発行する月刊女性雑誌で、講義録『高等女学講義』の副読本的な教養雑誌であり、また受講者とのコミュニケーションを図る場でもあった。大日本高等女学会と『大家族』については、「創価教育研究」第5号（創価教育研究センター 2006年）に、拙著「創立者の大学構想についての一考察（1）通信教育部開設構想とその沿革」に詳述しているので参照していただければ幸いである。

『大家族』は、第3巻第6号（明治41年4月）までの発行は確認できるが、現在まで現存が確認できたのは、この第3巻第1号だけである。東京大学明治新聞雑誌文庫が所蔵している。

今回紹介する「本會並に附屬女藝教習所の趣旨」は、明治40年10月に川越中学で行なわれた牧口の演説の大意である。『大家族』第3巻第1号では、「川越に於ける慈善活動寫眞會」として以下のように紹介している。

女藝教習所設立につて、其基金募集の爲め、關西地方へ本會幹事並に活動寫眞部主任者を派遣することとなり、其手初めとして、偶々川越出身者の徳通もありしにより去る十月十七、十八、十九の三日間、埼玉縣川越町に於て慈善活動寫眞會を催すことゝなりし所。元來同地は舊來の仕來り上、容易に物の纏まりかぬる處と聞及びしが、案外に同情を寄するもの出で、左記の有志婦人方は先づ本會支部の發記人となりて、催すの運びに至り、川越中學校長前原仙次郎君の如きは特に其主宰せる學校を會場とすることを承諾せられ、且つ種々の便宜を與ふるの外、元來通俗教育に熱心なるを以て有名なる徳望家のことで、自ら斬新なる理化器械を示して會衆に説明の勞を執るゝ程にて、咄嗟の企圖とて多少の障礙なきにしもあらざりしが、頗るの賑なりき。同地の有力者喜多欽一郎氏同令夫人、鈴木清太郎、横田氏等の特に盡力をなされしことは本會の永く紀念とする所なり。また東京に於て有名なる活動寫眞の所有主鈴木千里氏本會に對し、特別の好意を以て出張せられしことも茲に併記す。

この翻刻については、北川洋子が担当した。

Masayuki Shiohara（創価教育研究所事務長）

Yoko Kitagawa（創価教育研究所）

資料凡例

- 一、原文は縦書きであるがそれを横書きに直した。
- 二、本文の表記により記載したが、旧字体で記載できない漢字については新字体に改めた。
- 三、二字分のおどり字は>、あるいは>>と表記した。
- 四、誤字、誤植、脱字、誤記と考えられる個所にはママと表示した。

本會並に附屬女藝教習所の趣旨

本會幹事 牧口 常三郎

(川越支部に於ける本會慈善活動寫眞會場にての演説の大要)

現今東京に於ける男女學生の風紀の頹敗せる一面については、教育者も監督者も、憂世の識者も、均しく痛心する所。就中、女子は其一生の危期に於て、一度其の一身を誤るときは、後に幡然悔悟の時機ありとも殆んど恢復の途なきが故に殊に痛心措く能はざる所。眞に是れ國家將來の爲め懼るべき現象にして身親しく之を目睹するによりて特に深き感動を禁する能はざるなり。

今の世に誰れか女子教育の必要を感じざるものぞ、女子に學問は不用なり、將た危嶮なりとて惜むべき好學の心を壓抑せし時代は既に去りぬ。而して其の反動は來れり。女子の燃ゆるが如き好學の心と之を遂げしめんとする父兄の熱心とは都鄙至る所に磅礴たり。之が爲めに生徒は全國の女學校の門に溢れ、滔々として大都會に流れ込むなり。知らず各毎年の初めに當り東西より南北より汽車の滿載し來る幾萬の女學生中當初の希望を遂げ成功して郷里に歸るもの果して幾許ぞ。斯くして自ら都會學生の弊風も生ずるなり。さはれ女子教育の勃興は全く時勢の進歩に伴ふ當然のことにして固より慶すべく、國民の半數を占めて男子と共に國家を形造る女子の教育思想の斯の如くなることは寧ろ其遅かりしを憾むべきなり。果して然らば問題は如何にして女學の弊風を防ぎつゝ多數女子の教育を普及して其の希望を滿たすか、如何にして國民多數の生活程度に適當する女子教育を施すべきかにあり。

然るに之に對する女子教育の機關は如何、文部省は銳意之が設備を奨勵しつゝあり。民間亦た之を補ふに幾多の私立學校はあり。然れども年々僅に三萬有餘の女子を教授しつゝある現今の設備にては、小學校を卒業せる十數萬の女子を收容するには、甚だ不足なり。近來小學校卒業生の爲に補習學校は奨勵せらるゝと雖ども、是れ又た女子には男子のものを完備せる後にあらざれば及ぼされず、男子には最も便とする夜學の如きも青年女子には其風紀上殆んど不可能に屬せり。加之女學校は、多くは都會に偏するが故に、之に遠かる村落の女子に對しては通學、寄宿共に不便にして且つ不安なるが上に、月々多額の費用を要す。これ我が國中流以下の民度に適せるものにあらず、之が爲に、一方には、完備せる女學校に於て、日新の智識を得、更に進んで高等教育さへも受くる者あるに反し、他方には、志を懷いて空しく家に籠り、學問修業の時を過し終に一生學問の不足を嘆き、徒に他を羨むの人となる者甚だ多し。之を女子

將來の爲めに圖り、國家永遠の後に就いて考ふれば、決して袖手傍觀して已むべきにあらず、これ本會の設立せられし所以也。

大日本高等女學會は、深く此間の消息に就きて攻究せし結果、偏く教育諸大家の贊助を得、明治三十八年五月二十八日地久節を以て高等女學講義を發刊して、通信教授をなし、以て通學に困難なる女子をして、無學の嘆なからしめ、以て家庭に新鮮の空氣を通はしめ以て帝國昌運の基礎を固からしめんとせり。

爾來茲に三年、事に當りたる吾等の不敏によりて、幾多の困難に陥り、未だ當初の志望の萬一にも達する能はざるを愧づと雖も、愚直なる熱誠は幾分か社會の認識と同情を受くることとなり、幸に鞏固なる基礎を得るに至れり。而して一方に於ては、事業の進行に伴ひ、効果の次第に顯はるゝと共に、當初の企圖に對する自信は益々確實となり、従つて、前途の希望は、益々廣大となるに至れり。

此に於てか、従來の組織を改め、一層自修者の便を圖ると共に慈善の女藝教習所をも附設し學資なきものに無料にて女藝を習はしめ、其の尚通學し能はざる女子に對しては、本會の講義録を給與し、以て能ふ丈、女子教育の普及を下層に及ぼして其の缺陷を補ひ、且つ就職の道を講ぜしむることとせり。乃ち此の女藝教習所の資金を得て、以て憐むべき女子に生活の途を與へんが爲めに、茲に川越に於て活動寫眞會を催したる所以なり。

吾人不敏なりと雖も、内に高貴なる夫人方の熱心なる賛同と、其の指導とを仰ぎ、外に熱心なる全國の有志家、教育家等の贊助を得るに對しても、自今益々奮勵し、以て聊か國家社會の爲に盡す所あらんと欲す。願くは會の趣旨を賛成し學藝の不足を嘆するものは速に來つて學に就け正會員は月々僅か四十錢宛の會費を以て有力なる教育大家の親切なる講義を、恰かも教室に於て聽くが如く、家庭に於て氣儘に自修し、其上本會機關雜誌大家庭の配布をも受け座らにして全國會員と交際し、樂みの間に智徳を高むるを得ん。又た父兄諸君は修學に困難する女子の爲め、一には、慫むべき女子を助くる爲め、友人知己の婦女子諸君に、本會を御紹介あらんことを。

慈善を以て單に困窮者に金品を施與するにあるのみと解するは偏せり。必要なるには相違なし、効果は目前に顯はるゝには相違なし。されど其效果概ね案外に少きが上往々それが爲に、依頼心を生ぜしめて思はざる弊害を生ずること恰かも病者に一時凌ぎの投藥をなすが如し。

眞正にして、有効なる慈善の本質は、恰も衛生家が病氣の起らざる以前に豫防するの、却て病後の投藥に勝ること、幾層倍となすが如く、軟弱なる女子をして貧困に陥らざるやうになすにあり。金品を施與して、一時の慰籍を得しむるよりは、職業を興へて、永久に生活法を講ぜしむるは勝り、自ら生活の方法を見出さしめ、偶々陥る場合に處して、恢復の途を講ぜしむる能力を與ふることは、職業を興ふるよりも、更に大なる効果あることを認識するを要す。此意味に於て教育慈善は、進歩せる社會に於て、最も必要なることとして進歩せる慈善家の殆んど一致せる所なり。願くは、目前に直接其の効果の見えざるを以てとして、同情の念を薄からしめざらんことを。

吾等は川越町の有志者諸君、就中婦人諸君が、深く同情を寄せ、多大の盡力を爲されしを深謝す。殊に川越中學校長前原仙次郎君が率先して吾等の事業を信任して、特例を以て其學校の一部を開き、且つ多大の便宜を與へられしに對して深く感謝するもの也